

CO₂WG発足し活動

ACRAC

再生骨材製造の固定量把握

再生骨材コンクリート普及連絡協議会(ACRAC)は2025年度に

CO₂WGを発足した。3年間の活動期間中に全国各地の会員の再生骨材製造者のCO₂固定量を把握し、製造者が実際に取り組まれるのを前に固定化技術や固定量を増大させる方法について検討する。研究結果をとりまとめた再生骨材のCO₂収支およびインベントリデータを整理し、再生骨材のCFP(カーボンフットプリント)の開示を目指す方針だ。

WG主席の松田信広氏(東京テクノ・武蔵野土木工業)は「低炭素性の観点から再生骨材の機能を明らかにし、コンクリートに使用するメトリックを明らかにしたい。全国で均した再生骨材のインベントリデータは再生コンの使用者にとって価値あるものとなり、CO₂固定量の指標を示すことにより建設分野におけるカーボンニュートラルに寄与できる。会員にとってもCO₂固定量の知見を深めるきっかけになれば良い」と話す。

ここ数年でACRACへの新規加入社や再加入社が増えており、活動の

活性化につながるべくCO₂WGにはセネコンや生コン、中間処理会社や砕石会社、賛助会員のプラントメーカーなど幅広い事業者が参加し、オプザバーの北垣亮馬北海道大学教授の指導のもと活動を進めていく。

初年度の25年度は取り掛かりとして再生砕石(RC40~0%)の製造プロセスで固定化するCO₂量の把握とCO₂排出量に関する検討を行う。8都府県の会員10工場においてRC40を28日間保管した際の大気中の

CO₂固定量を測定し、工場によっては乾燥・湿潤状態の繰り返しによる固定量増大の実験も行った。CO₂排出量は工場全体のエネルギー使用量や、RC40の製造工程の使用機材にかかる電力使用量から算出した。「26年度に予定する再生骨材のCO₂固定量の検討に向け、充実したデータが集まってきたおりWG内で議論を深めたい」。研究成果は日本建築学会や土木学会全国大会で随時発表していく予定である。